

登山月報



グルドンマール(6,715 m)



2019年度全国山岳遭難対策協議会	2
第6回日本学生スポーツクライミング対校選手権大会.....	4
第129回 Mountain World	5
新連載 『日山協と私』	6
2019年U I A A理事会報告	7
2019 U A A A理事会報告.....	9
平成30年度事業報告 総括	11
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば、編集後記	12

2019年度全国山岳遭難対策協議会

今年の全国山岳遭難対策協議会は7月5日(金)に昨年同様、霞が関の文部科学省講堂にて開催された。初めに藤江陽子スポーツ庁 審議官から挨拶が有り、続いて以下の内容について報告が行われた。

報告Ⅰ 「平成30年における山岳遭難の概況」について警察庁より報告。詳細は警察庁ホームページに6月13日発表済み。昨年の遭難件数は2,661件、遭難者3,129人、うち死亡行方不明342人で依然増加傾向ではあるが増加率はやや穏やかで、死亡行方不明にあっては12人減少した。しかし遭難者の約80%を中高年が占めており、態様別としては、道迷いが全体の38%といった傾向は変わっていない。一昨年から報告内容について工夫がされており、年齢別や目的別など様々な切り口で報告されていた。気になったのは37%が単独での遭難、81%が計画書未提出による遭難であったことである。更に年齢のピークが昨年の60歳代から70歳代に推移しており、これはJMSCA遭対委員会での分析結果と類似している。来年度は80歳代へと移るのであろうか。また、外国人登山者の遭難も急増しており、過去5年で5.3倍となっている。特に冬のバックカントリーでの事故が増加傾向にある。これらの分析結果から減遭難活動への取り組み方針を早急に図りたい。

報告Ⅱ 「長野県消防学校の「山岳救助課」の概要について」長野県消防課より報告。長野県では防災ヘリの事故以来、地上から事故現場へのアプローチも増加しており、地上部隊の救助活動も増えている。しかしながら、山岳救助に関する技術習得はなかなか行えず、喫緊の課題である。そこで、昨年より山岳遭難に特化した「山岳救助科」チームを設立し、スキル向上を目指している。講師は県警救助隊に依頼し、1回の研修で40名程度の隊員が実践的なトレーニングを受けている。研修だけではなく、県警との連絡強化により有事における迅速な救助活動にも繋げていきたいとのコメントであった。

講演「ココヘリによる救助実績」についてオーセンティックジャパン(株)久我取締役より報告。ココヘリは東日本では殆どの警察、消防に配備されている。対して関西より西では殆ど配備されていないのが現状である。登山者の加入状況は既に2万人を超えており、月数百件の割合で加入が進んでいる。また、捜索実績は22件に上り21件が発見、1件のみ未発見事例となっている。しかしながらこの1件については会員の方が



八木原会長閉会の挨拶

発信機を家に忘れていったことが後日判明している。無事救出の事例として福岡県背振山でのハイカー、岩手県早池峰山でのトレイルランナーの2件が報告された。詳細はココヘリHPに掲載あり。ココヘリについてはJMSCA共済会でも登録料の無料化を図り、行方不明者の減少に努めている。

午後からは、ワークショップ形式による検討「遭難対策の実効性を高めるためのアイデアとカウンターパートナーを探そう」と題し、昨年に引き続き静岡大学の村越教授がファシリテーターを務めた。初めに村越教授から「遭難対策の多様性(マトリクス)」について講義があった。今回の全山遭は、救助する側の立場に立ったテーマで構成されており、このワークショップの中で唯一登山者が事故を起こさないため、事故を起こしてしまった場合のリスク管理についての講義であった。途中でワーク&シェア「遭難対策を振り返ろう」を挟み以下4つの講演があった。

- ①「安全登山対策のさらなる充実に向けて」富山県による講演。近年登山者の登山技術質の低下を訴えながら、これらの「登山客」と化した登山者にどのようなサービスを行っていくか、リスクマネジメントの視点に基づく「富山型の総合的安全登山対策」について講演された。
- ②「山岳安全対策ネットワークについて」鳥取県警による講演。大山でのコンパスシステム&ドローン衛星システムを活用した実証実験について報告された。遭難者の行動軌跡を携帯電話の情報から割り出し、通過ポイントを特定し、ドローンによる捜索を行うといった試みである。ドローンは衛星を使ったプログラム飛行を行うようで画像は人が監視するらしいが、過去事例から人間をリアル画像から見極めるの

にはやや無理があるように感じた。

③「山岳遭難救助のリスクマネジメント」富山県警による講演。奥大日岳での雪崩崩壊事故を通して、怪我を負ってしまった経験談の後、現場でのリスクマネジメントの重要性について報告があり、現場リーダーの責任についても言及した内容であった。また、リスクマネジメントは常日頃の訓練の場から技術と同様に養うものであるとの貴重な講演であった。

④「山岳遭難対策を法的に考えてみよう」溝手弁護士による講演。行政の法的責任と責任の限定。救助隊の法的責任と責任の限定について警察、消防、民間の夫々の立場について言及された。特にニセコでの救助中の要救助者の死亡事故を例にとり、法的責任の有り方について講演頂いた。また、民間救助隊についての法的責任についても話が合った。民間の場合、刑事責任は訴求されにくい報酬を頂いている場合は、それなりの責任が生じるため注意が必要とのこと。救助活動中の法的問題は登山者にとっては興味こそあれ、あまり遭難対策に繋がる演題には思えなかった。

講演後に纏めとして溝手弁護士、警察、消防、自然環境そしてJMSCA町田のパネルディスカッションが行われた。テーマは「より効果的な遭難対策のためには」で、各関係者からそれぞれの立場での意見が挙げられた。JMSCAからは、正しい知識を持った登山者教育のため、現在夏山リーダー制度を普及していることを報告した。また、2千件を超えてしまった遭難件数を1996年並みの1千件台に、まずは1千件の遭難事故を減らす活動「ストップ・ザ1000」を推進中であること、実行するためには警察、消防はじめ行政との連携が不可欠であると報告した。

終わりに国立登山研修所藤原新所長から今年度の「山岳遭難事故防止のために」の呼びかけ提案がなされ、JMSCA八木原罔明会長の挨拶をもって閉会となった。
(遭難対策委員長 町田幸男)



パネルディスカッション

山岳遭難事故防止のため

登山者は山岳遭難事故防止のために

次のことに取り組む

- 登山の第一歩は、目的とする山をよく理解することからはじまります。地図を基本にガイドブックや現地等から事前に山岳情報(登山道の状況、積雪量や雪崩の危険性、山小屋の営業期間など)を調べることを。
- 登山計画書を作成して、パーティー全員がその山を良く理解するとともに、体力と経験に応じた無理のない計画であるかよく検討すること。
- 登山計画書を家族や職場に知らせるとともに、登山届の提出が義務化されている山域では各都道府県の提出先や登山口の登山届ポスト等に必ず提出すること。
- 単独登山はやめて仲間と登り、ツェルトや救急用品、非常食を必ず携行して、ゆとりある行動を心がけて、安全に登山を行うこと。
- 山の事故は自己責任であることをよく考えて、山岳保険には必ず加入すること。
- 危急時に確実に連絡を取れる手段を確保するために、無線機、携帯電話等の通信機器、必要に応じて予備バッテリーを持参して登山を行うこと。
- 登山に出発する前に、目的とする山域の最新の気象情報・火山情報等を入手して、現地の状況を把握すること。
- 登山中は常にパーティー全員の体調や疲労に注意を払い、コースの状況・気象条件等に応じて下山するなどの冷静な判断を行い、山岳遭難事故を絶対に起こさない心構えで行動すること。

関係者は山岳遭難事故防止に向けて

次のことに努める

- 登山計画書の作成と登山届の提出を奨励し、計画的で安全な登山の普及に努める。
- 登山道、道標、トイレなどの整備とその適切な管理に努める。
- 今後設置する道標及び案内標示の様式、表記方法等について、可能な限り統一に努める。
- 詳細な山岳情報、気象情報、火山情報等の提供に努める。
- 中高年登山者やツアー登山参加者、外国人登山者の安全確保に努める。
- 遭難救助活動に従事する者は自分の命、仲間の命、遭難者の命、3つの命を守ること。

第6回日本学生スポーツクライミング対校選手権大会

第74回国民体育大会スポーツクライミング競技会リハーサル大会が、昨年に続き「第6回日本学生スポーツクライミング対校選手権大会」として、6月8日(土)～9日(日)の2日間、茨城県鉾田市で開催された。国民体育大会競技名称も今大会から、名実ともに「山岳競技」から「スポーツクライミング競技」となる記念すべき大会の幕開けとなった。

競技会場は、茨城国体スポーツクライミング競技会場である、鉾田市総合公園特設リード競技場、鉾田市総合公園体育館特設ボルダリング競技場において、鉾田市、茨城県山岳連盟の全面的なご協力により開催された。

【出場チーム数】

		女子	男子
B 競競	1部	8チーム	18チーム
	2部	5チーム	7チーム
L 競技	1部	4チーム	16チーム
	2部	4チーム	3チーム

参加チームは、北は酪農学園大学から南は長崎大学チームまで65チームの参加があった。

競技運営は、国体運営のリハーサルにふさわしい運営形態として前日には、岸田一夫鉾田市長、水村信二全日本大学スポーツクライミング協会会長、八木原聡明本協会会長の祝辞、挨拶での役員全体会議や出場チーム代表者会議(いわゆる監督会議)から始まった。



また、「アンチ・ドーピング研修」も、選手宿舎において行われた。

6月8日(土)「リード種目女子予選・決勝」、「ボルダリング種目男子予選・決勝」、翌9日(日)には「リード種目男子選・決勝」、「ボルダリング種目女子予選・決勝」が、時折霧雨のなかでの熱戦が行われた。

1部男子では本大会初出場となった日本大学から、現役日本代表のペアが出場。2部女子では、早稲田大学から現役日本代表と元日本代表ペアが出場した。



さらに2部女子では、地元から元日本代表で現在も日本代表のコーチを務める小林由佳選手が出場し、リード、ボルダリングで全課題を完登する圧巻のパフォーマンスを披露し、会場を沸かせた。

総合優勝校はそれぞれ、男子が立教大学(2年連続2回目)、女子は酪農学園大学が4年ぶり3回目の栄冠に輝いた。

【大学対校得点順位】

順位	学校名	得点
1	酪農学園大学	57
2	日本体育大学	48
3	明治大学	39
4	獨協大学	36

順位	学校名	得点
1	立教大学	51
2	日本大学	48
3	日本体育大学	42
4	長崎大学	27
5	千葉大学	21
6	東京農業大学	12
7	酪農学園大学	9
8	明治大学	6

完登、一撃賞には地元名産の「メロン」や協賛メーカー、「好日山荘」「スポルティバジャパン」様より豪華賞品が贈られた。この場をお借りし、ご提供感謝申し上げます。

今大会では、ユース世代で日本代表経験がある、もしくはトップクラスだった選手が大学へ進学し、大学で積極的にスポーツクライミングサークルを立ち上げて本大会へ出場してくる流れが、確実に少しずつではあるが確立してきた兆しがある。この選手の努力に、どう向き合っていくかが、今後のリハーサル大会の行方に大きく左右される。

来年は鹿児島県南さつま市で開催される。国体で使用するクライミングウォールでの競技会であり、多くの選手が参加できる機会として、参加条件に工夫を凝らしたい。
(国体委員長 西原斗司男)

第129回 Mountain World

平出=中島ペア、ラカポシ南壁を初登攀

池田常道

ネパールから毎夏大規模な公募隊が訪れるようになったK2(8611m)は、昨年夏の3日間に66人の登頂者を迎えた。強力なシェルパ・チームによるルートワークと酸素の使用が、この世界第2の高峰に「エヴェレスト化」を招くと一部で憂慮されてきた。外国人登山者に対して164の登山許可が発給された今季だったが、頂上ピラミッドの状態が悪く、ボトルネックで雪崩を受けたルートワーク隊が敗退、早々に諦めた個人やクライアントが帰国するなか、7月24日ようやく頂上までルートが通じた。

それを先導したのは、春シーズンのネパールから8000m峰連続登頂を継続中の退役グルカ兵、ニルマル・プルジャ・マガル(6月号参照、35)とそのチームで、ラクパ・デンドィ、ゲスマン・タマンにセブンサミット・トレックス(SST)隊からラクパ・テンバとチャンバ両シェルパを加えて、頂上までロープをフィックスした。踵を接するように、カナダのガイド、無酸素のエイドリアン・ボーリンガー(カナダ)がカルラ・ペレス(エクアドル女性、彼女も無酸素)他1人を伴って登頂。SST隊のクライアント8カ国10人は、天候が回復した翌25日、シェルパ9人とパキスタン高所ポーター3人、無酸素のハンガリー人1人と共に頂上に立ち、合計登頂者は28人となった。

この夏にパキスタンの8000m峰5座を登ってしまおうというニルマル・プルジャの執念が実を結んだかたち。彼はこの秋、チョー・オユーとシシャパンマ、マナスルに登れば、自らプロジェクト・ポッシブルと呼んでいる、「8000m峰14座を7か月で完登」計画を達成することになる。

*

ブロード・ピーク、ガッシャブルムI・II峰、ナンガ・パルバットなど他の巨峰も、例年のようにそれなりの登頂者を迎えたが、なんといっても今季の白眉は、平出和也と中島健郎によるラカポシ(7788m)南壁の初登攀だろう。シスパーレ北東壁を登って昨年のピオレドールを受賞した二人は、当初ティリッチ・ミールを目ざしていたが、許可が得られなかったため変更。

許可待ちの間に偵察しておいた、ラカポシ南面のバ



ボトルネックを脅かすK2頂上ピラミッドのセラック
エイドリアン・ボーリンガー撮影

グロット谷に入った。ギルギットやフンザから至近の距離にあるラカポシだが、西面から南西稜を経て初登頂(1958年英国隊)されて以降、北西稜(1979年ポーランド隊)、同北稜(早稲田大学隊)など数えるほどしか登られていなかった。85年オーストリア隊と87年明治大学隊が東稜を登ったが、東峰(7010m)までで終わっており、未完に終わったダグ・スコットの偵察を除けば南面は手つかずの状態だった。今回の平出=中島ペアは6月16日にダニョール谷の3660mにBCを置き、高所順応後27日に攻撃を開始。5200m、6800mでビバークして2日間の悪天候を凌いだ後、7月2日頂上に立ったもの。

このほか、デニス・ウルブコ(カザフ出身)は新婚旅行で、スペインのマリア・カルデルとガッシャブルムII峰(8034m)を訪れたが、新妻がキャラバン中に負傷したためひとりで南西稜から7月18日に登頂。その後、南ガッシャブルム氷河からII峰とIII峰の科尔へと直登し、西壁を経てII峰に登った。彼はこれ以外にも、ガッシャブルムVII峰(6718m)初登頂後にスキー滑降を試みて負傷したフランチェスコ・カッサルド(イタリア)など複数の救助活動にも従事した。



新連載 ～創立60周年に向けて～ (15)

『日山協と私』

秋田県山岳連盟 参与 高橋 守

私が秋田県山岳連盟（以下「岳連」）に関わったのは、全日本山岳連盟時代であり、昭和36（1961）年の秋田まごころ国体の準備段階からです。当時、日本山岳会でなければ国体の開催ができない、と云うことで急遽、日本山岳会秋田支部が結成され、その後、昭和35（1960）年に日本山岳協会（以下「日山協」）が組織され、国体が実施された。

この国体については、本誌601号で坂口三郎元日山協会会長が触れられていますが、台風直撃を受け、荒天対策が実施された国体第1号だと思えます。その大会で私がC隊3班の班長で、徳島県・福井県・和歌山県を担当しました。今でも年賀状を交換している方もいます。

以来、岳連の役員に携わり、日山協の事業に参加することになりました。富士山二合目で実施された指導者教本作りでは、各グループで検討された事項を執行部の方々が徹夜で「ガリ版」刷りして朝刊として発行され、その日の検討資料とするなど熱気ある研修会であった。この研修会で神奈川の澤村幸蔵氏、都庁の大田原氏、昭和山岳会の村山氏等と知り合い、澤村、大田原両氏とは終生お付き合いができた。

元日山協会長の鎌田久氏が東北行脚で岳連に参り、参与の増員を説かれ、加入した方もいた。

岳連で日山協主催の全日本登山大会を3回実施した思い出もある。

平成19（2007）年の秋田わか杉国体が、10年前に決まり、準備にかかったが、未だ時間があると云うことで、中々進捗せず、4年前位から日山協の指導を仰ぎながら徐々に進捗し、岳連の実行委員会も平成17（2005）年から本格的に活動したが、地元では平成の大合併で



記念植樹祭での開会挨拶

中々実行委員会ができず、悩んだ。合併を前に数か月の任期しかない町長選に森吉山岳会の近藤氏が当選し、即、実行委員会を立ち上げた。合併後、同年に北秋田市（鷹巣町・阿仁町・森吉町が合併）実行委員会となり、活動が活発になった。

国体開催（9月29日）前の9月17日の豪雨で、甚大な被害となり、国体開催が危ぶまれたが、関係者の努力で全国の選手・役員等の受け入れができ、担当者全員で喜んだ。

山岳競技では当初、秋田国体で縦走が廃止となっていたが、当局より前倒しできないか、と言われ、私としては、予定通り秋田国体で廃止したいと申し出て認められた。

大会は大変盛り上がり、クライミング会場では、田中文男元日協会会長が、マスコット「スギッチ」と一緒に災害募金を呼びかけ、北秋田市へ差し上げて感謝された。

山岳競技では、秋田県と宮城県が同点で、二県でトロフィーを獲得した。運営面では日山協の役員の方々よりお褒めの言葉を戴き、嬉しく思った。

秋田国体は、2回とも自然災害に遭いました。その後、縦走競技会場の一部に記念植樹を計画しましたが、各方面の了解を頂くのに6年かかり、平成25（2013）年に実施した。各都道府県と日体協、県体協、秋田県、北秋田市、日山協の合計52本の落葉樹を宮城県の方や一般市民の方々の参加を得て、盛大に実施した。2年後、



秋田わか杉国体記念植樹祭の参加者



秋田わか杉国体で災害支援募金を呼びかける田中元会長

田中文男元日山協会長にもお出で頂いて、風雪に耐えられなかった所に補植を行った。これからも大木になるよう管理していきたいと思います。

私ごとですが、長い間、山岳に携わったということ

で、平成27(2015)年秋の叙勲で、旭日双光章と平成30(2018)年に日本スポーツ協会より公認スポーツ指導者表彰を戴き、これ以上の喜びはありません。総て関係者のお陰と思い、感謝申し上げます。

2019年UIAA理事会報告

日時 2019年5月2日(木)～7日(火)

場所 マルタ共和国 パラダイスベイホテル

参加者 UIAA理事及び各委員会委員長

日本からの出席者 八木原暁明会長、
小野寺齊常務理事

マルタは地中海に位置している共和制国家でイギリス連邦とEUの加盟国である。アフリカ大陸に最も近い。島国で山はないが、海岸沿いには岩場が並んでおり、MCC (Malta Climbing Club) がホスト連盟である。山はなくとも当然UIAA加盟団体である。

今回はCAI (イタリア山岳会) が脱退して初めての理事会である。人事が一部変更されている。登山委員会の委員長がCAI出身であったので先の副会長のPF (Peter Farcus) (ハンガリー) が委員長になった。EB (Executive Board) も担当の変更があり、副会長にはTK (Thomas Kaer) (スイス)、事務局長にはPM (Peter Muir) (カナダ)、財政にはHD (Helene Denis) (フランス) になった。TKは国際スキー連盟の会長に立候補を表明しており、2019年度中には退任となる。

1. 到着 5月2日(火)

フランクフルト経由でマルタに入ったが、フランクフルトでは会長のFV (Frits Vrijlandt) と初対面のAJ (Alan Jarvis) (南アフリカ山岳会所属、イギリス在住、カナダ生) と一緒になったAJとは後で安全委員会でも一緒になった。

マルタに着いてからFVは別でAJと一緒に車でホテルまで送ってもらったのであるが、運転手にお前

はモスリムかとか、舗装されていない近道に行くのでshort cutかなど、結構初対面にしては失礼なことを聞いていた。

2. プレ理事会と理事会 5月3日(水)～4日(木)

さて、今回も前日に非公式の理事会を行ったが、翌日の公式と合わせて記述する。アジェンダは複数あったが、主なものだけを紹介する。

(1) 21世紀のUIAAについて

タイトルは厳めしいが昨年に続いての委員会の改革についてである。戦略担当のEBであるTKがPowerPointを使って、特に委員会の改革について踏み込んだ提案を行った。昨年あたりから特に強調されてきたことであるが、これらについてはWG (Working Group) を作って検討してきたことをあらまし発表したものである。WGはヨーロッパの国々をメンバーとして何度か会って打ち合わせを行ったようだ。戦略セグメントとして3つのグループがあり、当初は各々① Safety ② Access & Conservation ③ Mountaineering Developmentがあり、どういった内容にするかがつぎにあり、最後に戦略タスクを洗い出している。

各種意見が出て、最後に以下の表の様に担当委員会もアサインされた。

ただ、Mountain Conservationは話し合いの結果Mountain Protectionになった。

医事委員会はSafety Segmentに入っており、当初は安全委員会の中のサブとしていたが、安全委員会委員長の発言により、やはり医事委員会として独立した。

(2) 競技スポーツとの差別化

前項はいわゆる従来の登山の分野だけである。アイスクライミング等競技について質問してみた。そして



UIAA理事会メンバー



理事会の様子

Strategic segment	Context	Strategic projects/tasks	Commissions assigned
Safety	<ul style="list-style-type: none"> Mountaineering & climbing gear safety Medical expertise 	<ul style="list-style-type: none"> Gear testing Safety label Medical research & advice Courses & diploma Documentation & publication 	Safety commission - technical sub-committee - medical sub-committee
Access & Conservation	<ul style="list-style-type: none"> Protection of mountain nature Climbers' & mountaineers' ethics Free access to mountain & climbing ranges 	<ul style="list-style-type: none"> Global advocacy programs Research (in partners) Knowledge sharing Documentation & publication Education & advice MF Award 	Access & Conservation commission
Mountaineering Development	<ul style="list-style-type: none"> Development of recreational climbing & mountaineering Cross culture experience Education via climbers' issues Bring young people to the mountains 	<ul style="list-style-type: none"> Training standards & programs Mountain culture Climbing festivals & events Young climbers' program 	Mountaineering Development commission Youth commission

ら後で説明するとのことだった。別カテゴリーの雰囲気であった。

その後の説明を聞き、ユニットのスカイランニングのことはさておき、アイスクライミングに関しては、WGを発足させ、検討するなど何となく雲行きがおかしい。話している内容もなぜそうなのかが理解できない。隣に座っている韓国のC P (Christine Pae)に聞いてみた。そうしたら政治的な理由があるとのこと。ご承知の通りアイスクライミングは2014年のソチで公開競技を行い2018年の韓国、2022年の北京と続くはずであった。ところが確かに昨年の韓国のオリンピックでも景気の良い話は聞こえてこないのも実は腑に落ちなかった。改めて聞いたらIOCの意向で室内競技を中心に行うとのこと。つまり今後暫くの間オリンピック化はあり得ないようである。従ってアイスクライミング委員会からの要望でWGを作るか、Projectを作り検討するかのどちらかになる。大会は継続するが、予算としてはUIAA会員の会費からの支出は減少し数年後にはゼロにするつもりとの事。ただ、TKが最後に言っていたがあくまでUIAAのものであるとのこと。

(3) 名誉会員推薦について

韓国のC Pが提案を行った。UIAA会長で前KAF会長のIngJohn Lee氏をUIAAの名誉会員に推薦したいとのこと。前回一致で総会に提案することになった。

(4) 如何にしてUIAAの収入を増やすか

このようなタイトルで先ずセミナーがあり、その後各グループ、例えば安全関係、自然保護関係など5つのグループに分かれて討論を行った。

要はスポンサーではなく、勿論日本で言うところの補助金ではなく(そのような概念はない)、UIAAの名前で何らかの事業的なものを第三者に行ってもらい、その見返りを受けるとすればどのようにすればよいか、とのことでフリーディスカッションを行った。ただ、多くの人はなかなかそのことが理解できないようであった。私は日本の例を思い浮かべ、例えばココ・コーラが自動販売機をスポーツセンターやクライミングジムに設置し、その売り上げの一部を我々に寄付

してもらおう、これはJOCが実際に行っており、本協会も一部を利益に預かっているが、そのように受け止めた。しかし、私のグループはやはりUIAAはブランド名が低いとかいう人がいて、良いアイデアが出なかった。他のグループは奇想天外なものまで含め、最後の発表会で面白おかしく説明していた。ただ、本協会に参考になるようなものはなかった。

(5) 次回のMC会議

今回のMC会議の場所は、一度スイスとの提案がなされた。ただ、これは積極的なものではない。スイスは物価も高く、エクスカッションなども不便であるという理由からである。再度の提案がなされる予定である。

以上

Safety commission 会合に出席して

今回は理事会と同時期にアクセス委員会と安全委員会の開催がなされた。同時期と言っても理事会日程終了後である。私はどちらもCorresponding member (特派員) という立場で出席義務はない。Full memberなら出席義務があるが、たまたま同時期であり、安全委員会に出席してみた。

(1) 5月5日(日) 安全委員会内部ミーティング

タイトルは内部ミーティングとしたが、外部ミーティングもあり、翌日に製造業者を含めて行うとのこと。私は帰国予定もあり、内部ミーティングのみに参加した。参加者は10名、後からCTMA (台湾) のHank氏(新corresponding)が参加した。外部ミーティングは総勢45人を見込んでいたとのこと。

委員長はIMF (インド) のAC (Amit CHOWDHURY) である。英語圏であってもヨーロッパ人以外が委員長になるのは珍しい。互いに自己紹介してから始まった。ほとんどが工学系出身で大学教授とか、企業エンジニアである。

各国のUIAA Safety Label採用の実態が報告され、日本はまだペンディングの状態である。

秋のベストシーズンに週末利用の日程でソウルの名峰へ

【創業50周年記念特別企画】
ソウルの名峰・北漢山(プクサン)登頂 3日間

<div style="background-color: black; color: white; padding: 2px; font-size: small;">発着地</div> 東京(羽田)	<div style="background-color: black; color: white; padding: 2px; font-size: small;">出発日</div> 11/1(金)	<div style="background-color: black; color: white; padding: 2px; font-size: small;">旅行代金</div> 138,000円
---	--	--

※燃油サーチャージ(2019年7月20日現在:目安約1,600円)が別途必要です。

旅行企画・実施 観光庁長官登録旅行業第490号 / 日本旅行業協会正会員 / ボンド保証会員

アルパイン ツア サービス 株式会社

本社 〒105-0004 東京都港区新橋3-2-5(第5東洋海ビル4階) ☎03-3503-1911
 大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
 e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

UISA (国際スラッグライン協会) もユニットでUIAAに入っているが、ここにもSafety labelがあり、最初に紹介してくれた。スラッグラインは山よりも海岸で盛んらしい。

今の大きなテーマはCorrosion (腐食) である。その話をしているときに前述のAJが自分の持ってきた確保器具を出しながら、話をそらしてしまい、ACとかなり反目しあった。他のメンバーはうんざりといった感じであり、ACはかなりupset (この場合は怒り) したとも言っていた。それが終わってさらに午後のミーティングでも話をそらして自分の意見ばかり言っていた。

実験施設の話が出て、保有国はヨーロッパの製造業者以外に中国、韓国の名が挙がった。前者はなかなか連絡が取れにくい韓国施設は、7つの実験ができて、有効との評価があった。日本でもこのような施設がほしいものである。

トピックとしてはO社製のショベルの不具合についてである。ドイツのメンバーから指摘があり (具体的に示してくれた)、この装備は既に認定はされているが、再度業者と話す必要があり、翌日早速話すとのこと。

UIAAには委員用の専用のデータベースがあり、私も閲覧できるが、各機器の技術的情報が載っている。ただ、どうしてもヨーロッパ中心であることは否めない。彼らの発言も残念ながらそれを示している。地理的なものだけではないと思うが、我々にも技術的バックのある議論の場所がほしいものである。

(記 小野寺 斉)

2019UAAA理事会報告

日時 2019年6月3日

場所 台湾 花蓮 (ファーレン) 太魯閣 (タロコ)

日本からの参加者 八木原会長、小野寺 (記録)

今年はUAAA創立25周年、CTMA (Chinese Taipei Mountaineering Association), 創立50周年記念の年である。6月1日に到着してから台北市内で50周年記念パーティを行い、翌日はバスで台湾東部の太魯閣 (タロコ) 渓谷に向かいそこで理事会を行った。少数民族である太魯閣族が経営しているロッジがその会場であった。

今回の参加は9か国12団体であった。

参加団体は1-KAF (Korean Alpine Federation), 2-CAC (Coran Alpine Club), 3-JMSCA (日本山岳・スポーツクライミング協会)、4-JWAF (日本



集合写真

勤労者山岳連盟)、5-CTAA (Chinese Taipei Alpine Association), 6-CHKMCU (China HongKong Mountaineering & Climbing Union), 7-IMSCF (Iran Mountaineering & Sport Climbing Federation), 8-NMA (Nepal Mountaineering Association), 9-IMF (India Mountaineering Foundation), 10-CAM (Club Alpine Mongolia), 11-MSCFRK (Mountaineering Sport Climbing Federation Republic of Kazakhstan), そしてHostの12-CTMA (Chinese Taipei Mountaineering Association), である。中国、キルギス及びパキстанは欠席であった。

さて、会長国はKAFである。副会長国はネパール/NMA、イラン/IMSCF、中国/CMAとなっている。会議はアジェンダに則って行われた。UIAA副会長のTomas Kaerがゲストとして出席した。

開会に先立ち、物故者に対して黙とうを行った。韓国のKim Changho, パキстан前会長のAmir Glistan Janjua, そしてJess Roskelly, Davit Lama, Hansjorg Auerであり、本協会の澤田実君も含まれる。

1. 開会

上記出席国により、定足数が満たされて会議は成立した。続いてHost国のHank会長、UAAAのInjeong Lee会長、そしてUIAAのTomas Kaer副会長の順に挨拶があった。特にTomasはUIAAの現状について、イタリア、ドイツ、イギリスなどとなかなか意見が合わず、特にドイツなどとは12ヶ月間いろいろ話をしたがついに折り合わなかったことなど内情を淡々と話してくれた。ヨーロッパはいつもこうであるが、アジアは仲良くやっていて羨ましいとの口調であった。

2. 委員会について

委員会と言っても副会長国が分担して委員長を行っている。特に委員がいるわけではない。ネパール/NMAが遠征、イラン/IMSCFが自然保護、中国/CMAはコースの担当になっている。今年からは参加

国で委員会を構成しようということになり、遠征はネパール、インド、パキスタン、カザフスタン、イラン、モンゴルが構成国、自然保護はイラン、CTMA, CTAA, JMSCA, JWAF、ネパール、ユースはイラン、インド、CTAA、ネパールそしてCMA（欠席の為後日相談）となった。10月の総会で最終決定される。

日本は自然保護担当になることにより、JMSCAの活動をさらに活発化したいものである。遠征ではNMAが自国のactivityを発表しながら特に発言してエベレスト南面での大渋滞についてはまさに災害である、クライマーと旅行者が混合で行動し、non-management状態である、と言っていた。ローカルなレギュレーションではどうにもならない、UIAAにも言いたい、トラブルが起きて何もフォローしない。これに対してTomasはWebで注意喚起している、また、解決方法は単純ではない、とのこと。

3. 財政レポート

会計担当の台北／CTMAのHank氏から報告があり、会費納入について数年間タイ、マレーシア、シンガポールからの納入がないとのこと。インドは最近になって滞納分全額を収めた。このことについて監査役の香港／CHKMCUのFrederick氏からも指摘があった。結論としてHank氏はUAAAはソフトな組織なので長い目でみようとのこと。その代わりにInJeong Lee会長が\$1,000寄付するとのことでした。

4. 合同企画

ネパールで行ったパルドールピーク合同遠征について報告があった。また、カザフスタンで予定している岩登りフェスティバルでの募集の呼びかけがあった。キルギスは欠席なので例年の事業募集自体はあるものの宣伝は無かった。

UIAAで岩登りアワードをおこなっており、世界各地を回っているが今年はアジア地区なので協力したい、\$1000をサポートしたいとのことでした。

5. コラボレーションなど



会議の風景



CTMA 50年

博物館同士の連携を深めましょうとのことで、IMM、インドのダーズリン、ツェルマットの博物館などと交流を行いましょうとのことになった。

6. 来年以降の会議予定

- (1)2019年総会は10月12日(土)～13日(日)にキルギスに決定。
- (2)2020年理事会はJWAFで6月20日(土)～21日(日)を想定。
- (3)2020年総会はCHKMCU／香港に決定。
- (4)2021年理事会はIMF／インド、総会はネパールが手を挙げている。

7. その他

InJeong Lee会長がUIAAの名誉会員にノミネートされていることが報告された。

UAAAアドバイザーの神崎さんが来年のHAT-Jを中心とした日本国内の企画について発表し、協力を依頼した。

8. 閉会

InJeong Lee会長の挨拶の後、無事終了した。



JMSCA（ジムスカ）としての活動も2年目に入り、総務部、登山部、スポーツクライミング部の三部体制が整って来た。当初の予算編成においては各部に所属する専門委員会を中心に行い、運用も軌道に乗って来たところである。

組織運営についても「新たな事業部両輪体制下で、各部所属委員会は横の連絡を密にし、事業を企画・立案し推進していく。」ことを目標に立てたがその方向に向かいつつある。ガバナンス委員会により、スポーツ団体としてのガバナンスとインテグリティ、サステナビリティの実現化が図られてきた。これらは今後とも継続していかなくてはならない。

関係団体との連携については、国内の上部団体であるスポーツ庁、JSPPO、JOC、JSC、JWGならびに国内各関連機関、団体と連携・協力を図った。また、関係各省庁、国立登山研修所、国内山岳四団体、全国山の日協議会、その他民間企業等と必要に応じて連携を図り、登山事業及びスポーツクライミング事業の推進に努めた。

1. 総務部

- (1) 定款や規程・規則等を整備し、充実を図った。今後は運用状況を見ながら改定等を行っていくことになる。
- (2) 暴力相談窓口の開設を行った。
- (3) 理事会は総会に次ぐ重要な決議機関である。常務理事会は原則月1回であるが、理事会は定時が年4回と少なく、理事の具体的な活動の機会も少ない。SC部の業務急増につき積極的に動く理事を増やすべく、次年度からは理事会構成を改定した。全国から人物本位の役員候補者を推薦していただき、次期役員候補者選考委員会で選考して理事会に答申し、総会で選任することにした。さらに理事会の回数を増やし、業務執行理事（常務理事）を減らすなど効率の良い理事会運営を図ることにした。
- (4) 加盟団体規程に基づく報告義務については、加盟団体あつてのJMSCAであるので、統括団体として財政状況の把握は必要である。さらに将来的には、多くの岳連（協会）に法人化を目指してもらいたい。法人化することによって、組織のガバナンス強化が図ら

れる。

- (5) 専門委員会の常任委員及び専門委員を新たに委嘱し、専門委員会の会議体を整備した。今後は交通費の実費支給も視野に専門委員会活動の活性化に着手した。

- (6) JMSCA公認メンバー制度が創設された。名称は「CLUB JMSCA ITADAKI」定款で定める正会員や賛助会員とは違う、サッカー等のファンクラブのようなメンバー制度である。平成31年4月から募集を開始。

2. 登山部

- (1) 登山部会
登山関連の活性化については、約3ヶ月に1回程度登山部の委員長を中心に集まり模索してきた。各岳連の個人会員制度を調査し、各岳連（協会）に個人会員制度を推奨していくことになった。目的の1つであった組織化にどのように繋げていくかが課題である。
- (2) 夏山リーダー制度について
登山部が活発化するためには今後この事業をさらに発展させなくてはならない。平成30年度は、次年度からの制度スタートに向けて夏山リーダー講師養成の講習会が全国展開された。この制度が全国の岳連（協会）も含めて登山部を取り巻く状況を良い方向に作用することに期待したい。
- (3) 「山の日」記念事業について
この事業も3年目を迎え、申請は42件で、前年より開催が増加した。
- (4) 「少年少女登山事業について」
申請が28件。これも昨年よりは若干増加したが、なかなか全県実施にはほど遠い。原因調査の必要がある。
- (5) 国立登山研修所との共催による4つの新規安全登山事業について「安全登山」の趣旨に基づいた研修内容は、登山研修所の優れた講師陣を中心に充実した内容で行われた。このような研修会並びに岳連主催の講習会等への参加でレベルを上げ、安全登山に取り組んでほしい。
- (6) 安全登山指導者研修会
従前の中老年安全登山指導者講習会の名称を変更し、対象者を広げて開催した。東部は埼玉県、西部は沖縄県で開催し、内容的にも充実した研修会を開催できた。
- (7) 平成30年度の海外登山奨励金制度の応募は、3隊のみで、登山隊の成果は芳しくなかった。
- (8) キルギスへの派遣は4年目になるが

初めてレーニン峰の登頂を果たした。2018年はレーニン峰初登頂90周年記念の年であった。

3. スポーツクライミング部

(1) 代表選手の活躍

ワールドカップをはじめ、世界選手権、世界ユース選手権、アジア競技大会、ユースオリンピック、アジア選手権などアジアや世界レベルの大会で日本代表選手のメダル獲得が相次ぎ、メディアにおいても大きく取り上げられた。

(2) 対外的な課題

着々と環境は整備されて来ているが対外的な問題も発生している。オリンピックを控え、2019年に日本で開催予定の国際大会について、特にマーケティング等の権利面でIF、NF共に相互に恩恵を被る方向で調整する必要がある。

- (3) 公認大会規程が制定され、募集を開始した。既に、応募があり、実施の段階に入っている。JMSCA財政基盤の1つであり、さらに多くの公認大会の開催が望まれる。

- (4) 選手登録規程の改定があり、それに基づきシステムの変更を行った。時期的に急いでいたが周知が遅れ、利用者や岳連（協会）には迷惑をかけた。今後は気を付けて望みたい。選手登録にはA登録、B登録とあり、前者には倫理規程やADの講習受講が求められている。このことで受講希望者の日程調整が必ずしもうまくいかず全国から問い合わせが相次ぐ状況が生じた。

- (5) 審判・ルートセッター登録運用に関しては以前から批判の対象であった。前項の失敗を繰り返さないためにも十分なシステム構築を行うように準備を重ねてきた。しかし、元々のシステムの複雑さを乗り越えられるためには後1～2年程度必要である。岳連（協会）主体を個人主体に切り替えようとしたが、岳連（協会）の関与は言うまでもなく必要であり、運営をうまく図っていくことが求められる。

- (6) 選手登録事業、若手選手発掘、共同事業提携先等として、積極的にクライミングジム連盟との連携を図っている。前述の「CLUB JMSCA ITADAKI」もその一例である。

日時 7月11日(木) 14時～17時30分
場所 Japan Sport Olympic Square 3階
10号会議室

出席者 八木原会長、亀山、平山、丸各副
会長、尾形専務理事、小野寺、水島、合
田各常務理事、相良、蛭田、町田、村岡、
小日向、村上、水村、山口、六角、唐木、
安藤、前田、古賀、山本、古林各理事、中
島監事(理事23名中23名出席で理事会
成立) / 欠席者 古屋監事

1. 開 会

会長挨拶の後、合田常務理事が役員に
向けて「公益法人の各機関の役割と責任」
及び「スポーツ団体がバナンスコード〈N
F向け〉」について約45分間のプレゼンを
行った。

定款に則り会長が議長を務め、議事録署
名人は会長と出席監事1名とし、議事に入
った。

2. 議 案

議案第1号 総会議事録の承認について

●異議なく全員が承認した。

議案第2号 第2回理事会議事録の承認に
ついて

●異議なく全員が承認した。

議案第3号 電磁的記録による(決議省略)
理事会議事録の承認について

●異議なく全員が承認した。

議案第4号 正会員の入会承認について

●異議なく全員が承認。以下の方々の入退
会が承認された。

岳連関係・大分県：入会(吉野眞治)、
退会(波多野英哲)、兵庫県：入会(古賀
英年)、退会(中西研一)、福岡県：入会(鴨
粕徹)

学識経験者：入会(丸誠一郎、村上美智
子、水村信二、山口純子、六角智之、山
本讓、古林喜明)

学識経験者：退会(伊藤克己、仙石富英)

議案第5号 規程の改定について

①加盟団体規程

●加盟団体の名称変更に伴う規定改定は異
議なく全員が承認した。

②海外登山奨励金に関する規程

●異議なく全員が承認した。

③自然保護指導員に関する規程

●異議なく全員が承認した。

④国体競技に関する規程(規定)

J S P O国体委員会への規程改定の要望
であり、J S P O国体委員会で改定案が
認められたら規程改定案を提案するこ
とになった。

議案第6号 世界選手権、世界ユース選手
権の派遣選手について(後日常務理事會
での回議にてお諮りすることの承認)

●異議なく全員が承認

議案第7号 第1次補正予算について

世界選手権絡みの補正予算は、後日提案
されることになり、議案第7号は取り下

げられた。

議案第8号 各理事の担務について

S C部、登山部から常任委員・専門委員
も含めた提案があり、理事の担務は承認
された。役員の賠償責任保険は前年同様
保険料の9割を法人負担、1割を役員負
担として付保することを承認。

議案第9号 指導員、審判員の認定承認に
ついて

資料に基づいて、11名(埼玉)のS Cコー
チ1と1名(長野)の山岳コーチ1の認
定承認が諮られた。

●異議なく全員が承認した。

議案第10号 後援、協賛等の依頼承認に
ついて

(1)神奈川県山岳連盟「かながわ山の日 in
HADANO 2019」後援名義使用申請

●異議なく全員が承認した。

議案第11号 世界選手権競技壁の活用に
ついて

●平山副会長から第80回青森国体での活
用について説明があり、文書については
常務理事會で検討することで承認。

議案第12号 J O Cジュニアオリンピッ
クカップ南砺2019開催要項の承認につ
いて

●一部訂正の上、承認した。

議案第13号 海外登山隊奨励金交付決定
について

●以下の3隊が異議なく承認された。

1. 隊の名称 H C C

隊長 増本亮 隊員 増本さやか
交付金 30万円

2. 隊の名称 チームB & S

隊長 横山勝丘 隊員 加藤直之
倉上慶太
交付金 20万円

3. 隊の名称 単独フリー登攀隊

隊長 倉上慶太 交付金 10万円

議案第14号 A A Cクライマーズミート
派遣について

●以下の派遣が、異議なく承認した。

派遣者 湯浅誠二(京都府岳連)

3. 報 告

報告1号 6月月次報告

相良理事が資料に基づいて報告。

報告2号 J S P Oからの通知(受講者本
人確認の徹底)について

小野寺常務理事が資料に基づいて報告。

報告3号 I F S Cクライミング世界選手
権2019八王子準備状況

村岡理事から経過報告があった。

報告4号 内閣府報告途中経緯

小野寺常務理事から経過報告。

報告5号 登記途中経緯

議案第3号で説明した通り。

報告6号 国体関連/正規視察報告/後備
県に対する要望書

平山副会長から資料に基づいて報告。

報告7号 アスリートパスウェイ戦略的支
援委託事業の契約予定者として決定

小野寺常務理事から経過報告

報告8号 役員等の派遣について(7月12
日～8月9日)

①安全登山サテライトセミナー

7月13日(土)～14日(日) 於：大津市民会
館 古賀・前田理事

②文部科学大臣表彰式

7月23日(火) 於：ホテルニューオタニ
「鶴西の間」八木原会長

③東京2020オリンピック・パラリンピッ
ク1年前セレモニー 7月24日(水)

於：東京国際フォーラム・ホールA

尾形専務理事

④スポーツ国際展開基盤形成事業 第1回
情報共有連絡会議 7月31日14時～

於：J O C事務局13階 小野寺常務理
事、小日向理事

⑤インターハイ登山大会

8月2日(金)～6日(火) 於：宮崎県祖母山
系 八木原会長

⑥高校登山指導者夏山研修会

8月7日(水)～9日(金) 於：国立登山研修
所、室堂周辺 小野寺常務理事

4. 専門委員会議事録報告(抄録)

4-1 遭対常任委員会

6月29日～30日 於：東京晴海・会員
会館 出席：常任8名専門7名計15名
ア) 全国遭難対策委員長会議について

①来年度の委員長会議

期日：2020年6月27(土)、28(日)

開催場所：東京オリンピック開催準備の
関係により海員会館が使用できない可
能性がある。

②前年度課題としていた全国遭難対策委員
長名簿の整備は、各都道府県委員長にご
協力いただきメーリングリストが整った。

イ) 遭難対策委員会研修について

期日：8月24(土)、25(日) 場所：長野
県山岳総合センター

ウ) 無雪期レスキュー講習会について

期日：9月6日(金)13:00～9月8日
(日)13:00 場所：国立登山研修所

エ) 講習会における事故防止活動について

①減遭難の一環として、講習会における事
故防止活動を行う。

方法：講習会マニュアルを作成し、主催
者が行わなければならないこと、行って
はならないこと、受講生に行わせてはな
らなければならないこと等を明確にする。

4-2 指導委員会

7月1日(月) 於：岸記念体育会館

出席12名

ア) 報告事項

①8月15～18日の夏山リーダーWG主催
の夏山リーダー講習会・検定会について

②4月20、21日に千葉県山岳連盟で、夏山
リーダー資格検定会を開催。

受験者5名、規定に則り、指導委員会で
審議して常務理事會で認定したい。

イ) 夏山リーダー関連に検討課題について

・那須の講習会のアナウンスについて

・8月世界選手権大会でのブース展示につ
いて

ウ) 派遣

8月1日～5日まで 野村副委員長をイン
ターハイの技術顧問として派遣。

4-3 登山医科学委員会

6月23日 13時～14時 於：つくば国
際会議場304号室、出席：常任4名、専
門5名、欠席者：常任4名

ア) 三重インターハイ救護の現状と問題点
について

①W B G T 30℃を超える高温・多湿の中での開催となったため、熱中症の発生が危惧された。救護班から熱中症予防の重要性を達言し、大会本部は縦走コースの短縮と荷物の軽量化という対策を講じてくれたため重度の傷病者は発生しなかった。今後は気象条件を考慮した運営基準を決めることが望ましい。また、救護班ではW B G Tや他の気象条件を記録しながら救護に当たり、傷病者の発生状況を分析する。これらの結果より運営基準作成に貢献したい。

②点滴や薬物など保険診療でなければ使用できない医療品を山中の現場で調達することは一般的には難しい。三重では菰野厚生病院の援助の元で実現できた。今後の大会でも同様の病院の協力を得られるかどうか課題となる。

③今年度の宮崎インターハイでは高千穂を拠点として開催され、救護班として参加する予定である。以上の報告を受け、今年からは登山部医科学委員会事業として救護を担当するとともに経年的に使用できる医療器具があるのであれば予算化したい。

イ) 追加事業として夏山リーダー講習会の支援について討議

①この講習会で使用されるテキストではセルフレスキューと運動生理学の項目で40頁ある。これを医科学委員会が担当する。

②講師は全国に散在している国際山岳医や山岳看護師の参加希望者を想定する。今後は日本登山医学会認定山岳医委員会の運用小委員会と連携して参加希望者を募り準備を進める。また、テキスト内容を医科学委員会委員がチェックし必要に応じて改定することも考慮する。

4-4 第2回選手強化委員会

6月28日(金) 於：原宿

五輪推進室 参加8名

ア) 報告

①スピードジャパンツアーの要望について
②2019年アジアユース選手権重慶大会選手選考基準について

1) 今後の強化委員会の見直し

①2019年度強化委員会メンバーの選任(6月末まで)について

②今後の強化委員会改革構想(安井案)について

・2021年：[強化委員会＝日本代表チーム強化＋地域育成・指導者育成]と[日本代表チーム]を分離し、強化委員会が日本代表コーチを委嘱する。

・2020年：強化委員会/日本代表チーム(強化委員会と日本代表チーム分けていく移行期。規定や評価基準などの策定作業)

・2019年：強化委員会(日本代表チームを含む)が日本代表チームも含めて全てを担っている状況。東京2020オリンピックまではこの体制で進む。

「これからの強化委員会の役割」

I 日本代表チームの選出(選手、コーチ、HP Sとの連携など)

II 強化予算の管理、事業の実施(合宿、遠征など)

III 地域の活性化

地域間の実力格差を軽減し、もっと多くの地域から有能な選手が発掘できる体制を創る。

IV 指導者の育成

低年齢化してきている現状で多くの問題が放置されている。指導者の育成により、問題の早期解決とタレント発掘を促進するための活動を全国へ広めていく。日本全体の競争力を高める取り組み。

V パリ2024オリンピックへ向けた強化特に、スピード選手の育成・強化(一

貫指導)。日本代表チームの新体制準備とパリの準備をスタートさせる。

ウ) アスリートパスウェイ推進事業(J S C補助金事業)への提出について

4-5 第7回登山部門連絡会議

6月15日(土)14:00~17:00 於：J M S C A事務局 出席11名 委任1名

ア) 議題

①遭難防止啓発事業について

・「ストップ・ザ1000」キャンペーンを夏山リーダーと連携させて啓発する。山岳4団体にも協力を呼びかけ

・6/13の共済委員会で、J M S C Aをもっと世の中に知らせる(認知度が低い)ことについて検討。→新規事業として、山岳共済の広報活動でJ M S C Aをアピールする、減遭難をアニメ化し、SNSで周知(t o t o補助金活用、共済会予算400万)。10/3納品予定(シナリオ制作は5/20済)、90秒のもので、登山用品等で流す。

②登山部門連絡会の体制について

・今後の体制について、担当副会長：丸副会長、登山部長：水島常務理事。

J M S C Aは、一般登山者のみならずトップクライムを目指すアルパインも考えなければならぬ。日本のトップレベルを扱うのが国際委員会だが、沢田委員長が亡くなり、今後をどうするか。登山も頂点を引っ張っていかねばならない。国際委員会は、頂点を高め、すそ野を広げるため委員長候補を打診。山岳スキーは当面、笹生氏(担当 唐木理事)に依頼。

5. 会務・役員派遣等(6月16日~7月10日)

(1)令和元年度定時総会

6月16日(日) 於：岸記念体育会館101~103 八木原会長ほか

(2)令和元年第2回理事会

6月16日(日) 於：岸記念体育会館 八木原会長ほか

(3)東京オリパラ組織委員会国内競技団体協議会 6月18日(火) 於：晴海トリトンY棟18F 尾形専務理事

(4)(公財)スポーツ安全協会評議員会 6月20日(木) 於：東海大学校友会館「望星の間」 尾形専務理事

(5)(公財)日本スポーツ協会評議員会 6月21日(金) 於：品川プリンスホテルメインタワー26F「パール26」 尾形専務理事

(6)登山部全国国際委員長会議

6月22日(土)~23日(日) 於：大橋会館 八木原会長、鈴木副委員長

(7)日本ワールドゲームズ協会総会

6月24日(月) 於：日本財団2F大会議室 尾形専務理事

(8)W C H八王子実行委員会

6月25日(火) 於：エスフォルタアリーナ八王子 尾形専務理事、村岡理事

(9)J O C評議員会

6月27日(木) 於：J S O S 14階 八木原会長

(10)第80回青森国体正規視察

6月27日(木) 於：青森 平山副会長、西原委員長

(11)全国遭対委員長会議

寄贈図書

雑誌	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.866
	(株)山と渓谷社	「山と渓谷」No.1012
	ENTREPRISES	Atleta de la FEDME
	埼玉県スポーツ協会	スポーツ埼玉「SPORTS」Vol.284
	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」6月号
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.715
	日本万歩クラブ	「帰れ自然へアルク」8・9月号
	群馬県山岳連盟	「山岳ぐんま」第113,114号
	長野県山岳協会	「やまなみ」No.233
	健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」7月号No.495
	日本トレーディング指導者協会機関誌	「JATI EXPRESS」Vol.71
	FEEC	「VERTEX」284
	ソル・メディア	「クライマーズ # 012」
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第625
	(一社)大阪府山岳連盟	「山岳おおさか」No.221
	中華民国山岳協会	「中華山岳」雙月刊> 271
	日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.358
	国土緑化推進機構	「ぐりーんもあ」No.86 夏
	(公財)日本スポーツ協会	「Sport Japan」Vol.44
	(公財)日本スポーツ協会	「J S P Oスポーツニュース」Vol109「フェアプレイニュース」Vol109
	(株)日本運動具新報社	「スポーツ産業新報」
	(公社)東京都山岳連盟	「とがくれん通信」2019年2号
	La rivista del Club alpino italiano	「M o n t a g n e 360」maggio 2019
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」8月 No.534
	日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト	「H A T - J N E W S」No.114
新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第343号	
(公財)全国高等学校体育連盟	「全国高体連ジャーナル」2019年7月号 Vol37	
東京野歩路会	「山嶺」No.1073 8月号	
日本運動具新報社	「産業新報」第2260号	
(公社)日本山岳会	「山」7月号	
日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」7月号	
おいらく山岳会	「山行手帖」No.716 8月1日	
日本山岳文化学会	「山岳文化」2019年第20号	

編集後記

日山協山岳共済会の山岳保険加入者数が伸び悩んでいる。同じ補償であれば他社に比べ保険料が46%割引(平成30年度実績)。ダントツに格安である。山岳情報誌、インターネットサイトに掲載をしているがあまり効果が上がっていない。JMSCA両輪の片側、登山部の血液であり、活力である認識が薄くなってきているのだろうか。再度会員の皆様に「会員のネットワークによる加入促進」の協力をお願いしたい。

(広報担当 水島彰治)

表紙のこぼれ

グルドンマール(6,715m)は、その昔、グルドンマールが詠ったゴルダマー(Gordamah)とも呼ばれていた。山名は北麓のグルドンマール湖からきており、チベット語でグルは、尊者を意味し、ドンは顔、マールは赤、つまり赤い顔した尊者の意。

1963年、イギリスの第6次エベレスト隊の帰途、E・シプトンによって登られた。彼は、チベットからコンラ・ラを越えてシッキムに入り、グルドンマール湖畔にBCを設営。そこからカンチェンジャオとのコルに出て、コルから西稜を辿って7月3日にシプトンとE・G・H・ケンプソンが初登頂した。写真はH・Kappdia提供。

(記 尾形好雄)

登山月報 第605号

定価 110円(送料別)

予約年間 1,300円(送料共)

昭和45年12月12日

第三種郵便物認可

(毎月1回15日発行)

発行日 令和元年8月15日

発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号

Japan Sport Olympic Square 807

公益社団法人

日本山岳・スポーツクライミング協会

電話 03-5843-1631

FAX 03-5843-1635

一般財団法人 日本トレイルランニング協会

〒141-0031

品川区西五反田6-3-23-205

☎03-3492-0355 FAX 03-6451-3767

NPO法人 北丹沢山岳センター

神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会

事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

・北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会

・陣馬山トレイルレース実行委員会

・道志村トレイルレース実行委員会

・八重山トレイルレース実行委員会

・東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会

・上野原秋山トレイルレース実行委員会

大会々長 杉本憲昭

山岳
雑誌

岳人

がくじん

山と人、時代をつなぐ「岳人」

9月号
発売中

【特集】南アルプス

★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中!

毎月15日発売 価格815円(+税)



年間購読がおすすすめです。

購読割引 送料無料 限定品プレゼント

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常本体価格12冊 年間購読なら12冊
~~9,780円~~ (+税) → **8,965円** (+税)

1年間で815円
1冊分無料!

年間購読特典

岳人でめぐい

登山中の汗拭きや下山後の入浴などで何かと重宝する手ぬぐいです。



全国1,800カ所以上
でご優待!

岳人カード



「岳人の湯」や「モンベル フレンドショップ」
など提携施設でカードをご提示いただくと、
各種ご優待を受けられます!

モンベルクラブ・メンバーズポイントの加算やご利用はできません。

年間購読のお申し込みはこちらから! >>>

<https://www.gakujin.jp/>



全国の
モンベルストア
でも受付中!

お問い合わせ

モンベルポスト



0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

あなたを守る。
あしたを作る。
三井住友海上

損害保険と聞いて、
なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ることを、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。

みつ い すみ とも かい じょう
三井住友海上
時空保険
探査部
Space-time Insurance
Exploration Department

人類にとっての
損害保険の
必要性を調査。

時空を超える
ゲート。

社員証をかざせば
タイムワープ。

立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上



山岳保険の加入は 登山者のマナーです

あなたの山岳保険は大丈夫ですか？

- 傷害死亡・後遺障害
- 救援者費用
- 傷害通院費用
- 個人賠償責任
- 遭難捜索費用
- 傷害入院費用
- 傷害手術費用

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。
公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会
携帯サイト (www.jma-sangaku.or.jp)



WEBからもお申込みいただけます (www.sangakukyousai.com)